# コロナ禍でつながるということ
## ～愛知の子ども食堂・シェアリング桑名・太陽の家の事例から～

成谷　世那

### 序章　「子どもの居場所」を守る子ども食堂

本稿は子ども食堂がどこから始まり、コロナ禍を経てどこへ向かうのか、また、筆者が関わってきた子ども食堂「太陽の家」と、筆者が仲間と立ち上げたボランティア団体「シェアリング桑名」に焦点を当て、資源の持たない個人やNPO法人がコロナ禍でどのように子どもの居場所を守ってきたのかを明らかにする。これにより、コロナ禍後の子どもの居場所のあり方を展望する。

子ども食堂は、居場所を奪われがちな「子ども」を中心とした地域の交流拠点という役割を担ってきた。「誰でも立ち寄ることの出来る場」として子どもは食を通じて集まった多様な世代の人たちと交流する。その中で社会性を身につけ、将来の「ロールモデル」獲得するといった「学びの場」、困っている子どもを見つけ出し、支援へとつなげる「医療の場」としても機能し、社会的なインフラとしての役割を担っていた。社会的インフラとは図書館や学校などの集団生活を条件づける場の事である[28)]。

新型コロナウイルスの影響で三密を避ける新しい生活様式が叫ばれた。人と関わり、人間関係を構築する活動である子ども食堂も例外なく、厳しい制限を課せられた。新型コロナウイルスの影響により、従来あった子ども食堂が活動変容を余儀なくされた。その中で子ども食堂が新しく立ち上がるという流れも起きた。新設・既存の子ども食堂もフードパントリーや弁当配布という新しい支援の方法を活用し、つながりを構築・維持してきた。こういった新たな支援方法の工夫もあり2020年より1047箇所増え2021年には少なくとも6,014箇所に達していることが確認された[29)]。

本調査では愛知県内を中心とした子ども食堂20か所に協力していただきzoom、もしくは対面で一時間ほどインタビュー調査を行った。まず、子ども食堂の立ち上げの経緯を聞き運営者の方々が子ども食堂を立ち上げた思いを記述する。

---

28）エリック・クリネンバーグ、「集まる場所が必要だ　孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学」英治出版株式会社　2021

29）NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえ「こども食堂全国個箇所数調査2021：確定値発表のお知らせ」https://musubie.org/news/4792/

| 名称 | 開催形式 | 開催目的の重きをどこに置いているか |
|---|---|---|
| 太陽の家 | 会食形式、フードパントリー、学習支援 | 社会的に弱い子どもたちの居場所づくり<br>子どもとその保護者に限定した子ども食堂を開催 |
| 東山ぐぅぐぅ食堂 | 会食形式、フードパントリー、学習支援 | 子ども＋ご近所の地域食堂<br>市営住宅の子どもと高齢者の交流 |
| かたろう食堂 | イベント | 小学生～高校生と交流 |
| おかださんの台所 | 会食形式、フードパントリー | 孤食をしている子どもや生活に困窮して食べるものがない子どもに、にぎやかな環境で食事を提供<br>現在は子どもの居場所作りに重点 |
| つなしょ | 外遊び、イベント | 今の子どもは自分で考えて遊ぶことも難しい<br>自分で考えて遊ぶ力を養う |
| みずほみんなの食堂 | フードパントリー、学習支援 | 地域のハブとなる。始まりは「子ども」であるが「多世代」、「多様な人」に開かれた場所にしたい。「貧困」をなくすには子どもだけでは解決できない、子ども食堂は（ツールとして）柔軟に形を変える必要 |
| 子ども食堂@なかぶん | フードパントリー | 調理師免許を駆使して人のためになることをしたい。フードロスの問題を解決する。子どもの居場所 |
| 日進絆子ども食堂 | フードパントリー、学習支援、体験 | フードパントリーだけでは居場所として機能せず、交流がないことから２か月に一度【体験】を実施<br>貧困による潜在的な問題に気づく<br>短時間で多くの人に食を届ける方法を考えドライブスルー方式で配布 |
| よつ葉子ども食堂 | 会食形式、弁当配布 | 施設の周辺に住んでいる子どもたちに話を聞いたところ、「鍋を家族で食べたことがない」という声が聞こえ、大勢でご飯を食べる経験をさせてあげたい |
| せんなり子ども食堂 | フードパントリー、弁当配布 | コロナ禍で困っている人たちを支援したい<br>ゆくゆくは地域の活性化、いろんな人とコミュニケーションを取れる場所を作りたい |
| WAIWAIのわミー | 会食形式、学習支援 | 子どもの貧困が話題に、子どもの学習支援などの活動も行っていった。子どもの貧困は親の貧困。 |
| ニコニコごはん | 弁当配布 | 元々子ども食堂をやってみたいという思いがあった周りの子ども達、困っている方、貧困家庭のために何かできる事をしたい |
| パークサイド食堂 | 弁当配布 | 孤食をしている子どもたちを減らす事と地域の交流地点となる事。親同士が情報交換を行う交流の場 |
| キッチンキング子ども食堂 | 弁当配布 | ご飯を食べられない子どもがいることを知り、目に見えない貧困を解決するために自分たちにできる事をする<br>自ら貧困に出会い救いたい |
| こども食堂Qchan代官店 | 会食形式 | コロナ禍で子ども・高齢者が孤立しているという報道や現状を見て、思い立った。本当に困っている人が気軽に入ってこられるような、雰囲気を作る<br>明るく楽しい場所、来ると安心できる場所を作る |
| ソーネみんなでごはん | 弁当配布、フードパントリー | 子ども限定でなく、地域のみんなが集える地域の食堂<br>食堂に戻すことが決まったら、お弁当も続けるのか話し合う。 |
| マンナ子ども食堂 | 会食、フードパントリー | 誰でも参加できる場所を作りたい |

表１　子ども食堂の活動形式と開催目的

湯浅によると、子ども食堂は「地域の交流拠点」、「子どもの貧困対策」という二つの目的を持っているという[30]。この二つの開催目的と同じような思いを子ども食堂運営者たちはどこに重きを置いているかという質問から、子ども食堂を「交流の場」と位置付けている団体と「課題を発見する場」と位置づけている団体があるといえる。

## 第２章　コロナ禍で交流を求める子ども食堂

### 第１節　子ども食堂はどこから始まる

新型コロナウイルスの影響で、会食型で子ども食堂を開催する事が難しくなり、フードパントリーや弁当配布といった配布型活動を取り入れる子ども食堂がほとんどであった。

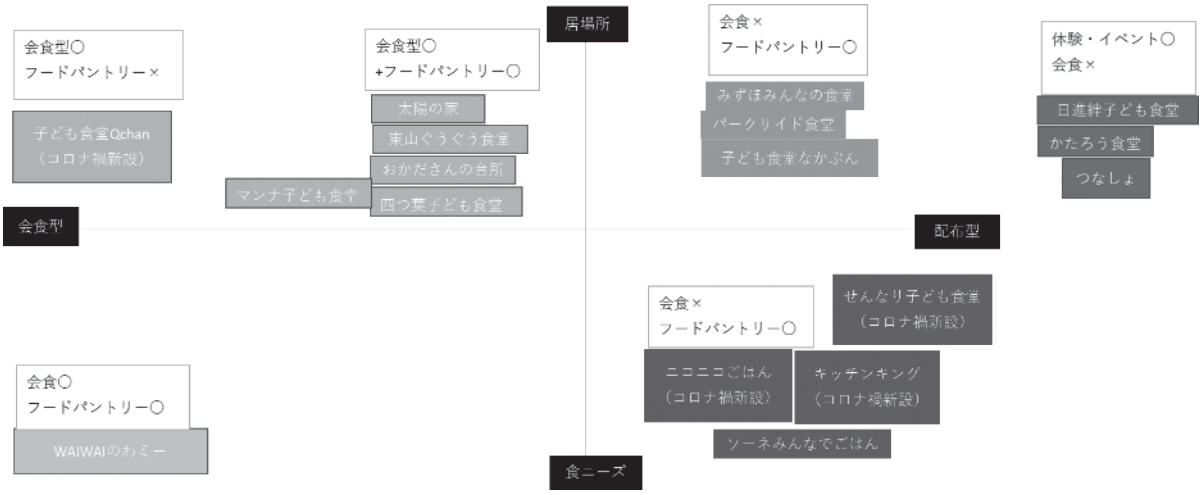


表２　子ども食堂目的と活動形態のポジショニングマップ

表２では子ども食堂開催目的と活動形態を一目で分かるようにポジショニングマップを使って表した。縦軸は「交流」、「居場所」というキーワードを使った団体を居場所と位置づけ、「貧困」、「困った人を助けたい」というキーワードを使った団体を食ニーズと位置付けた。横軸は活動形式によって区分をした。

Ａには、せんなり子ども食堂・みずほみんなの食堂・パークサイド食堂、Ｂには子ども食堂 Qchan・太陽の家・東山ぐぅぐぅ食堂・おかださんの台所・四つ葉子ども食堂、ＣにはWAIWAI のわミー、Ｄにはキッチンキング・子ども食堂なかぶん・ソーネみんなでごはん・ニコニコごはん、せんなり子ども食堂が当てはまる。Ｅは会食型でスタートしたが、コロナ禍で会食型にこだわらず体験やイベントに特化した３団体（日進絆子ども食堂・かたろう食堂・つなしょ）が当てはまった。多くの団体がコロナ禍で配布型の活動を取り入れている事がわかる。配布型の活動は短時間で効率的に配布が行えるメリットがあり、会食よりも時間や労力がかからないという。しかし、配布型を行っている運営者によると、配布型では「親が受け取りに来る」事がほとんどで子どもだけで取りに来る事は少ないという。参加者との交流ができず、大人にとっても子どもにとっても居場所となる事が難しいという。本来の目的である「地域の交流拠点」という面がコロナ禍によって失われている事がわかる。また、

30）湯浅誠，2019,「こども食堂の現状とその意味と価値」『チャイルドサイエンス』18，15-20

会食型とフードパントリーを併用している子ども食堂もあるが、いずれも黙食･小規模開催･高齢者は不参加と、以前の多世代交流の要素は少なくなっている。

| 名称 | 今後の展望 |
|---|---|
| 太陽の家 | フードパントリーを縮小し、個別支援に力を入れたい　子どもの居場所づくりに力を入れたい |
| 東山ぐぅぐぅ食堂 | 高齢者とはパントリーでつながる　子どもは会食でつながる |
| かたろう食堂 | 会食を開催する気はない　イベント行いたい |
| おかださんの台所 | ランチタイムに会食をやりたい |
| つなしょ | 会食にはこだわらない |
| みずほみんなの食堂 | 食品配布でニーズが見えたため配布型は検討中　会食形式には戻したい |
| 子ども食堂@なかぶん | 会食に戻したい　配布型は継続しない |
| 日進絆子ども食堂 | 体験に力を入れたい |
| よつ葉子ども食堂 | 弁当配布は継続予定　会食再開したい |
| せんなり子ども食堂 | 会食形式にしたい |
| .WAIWAI のわミー | 会食とフードパントリー維持したい |
| ニコニコごはん | 会食型を行いたい |
| パークサイド食堂 | 会食を再開したい　フードパントリー検討中 |
| キッチンキング子ども食堂 | 会食と配布併用を検討 |
| こども食堂 Qchan 代官店 | 会食継続 |
| ソーネみんなでごはん | 会食は再開したい　配布形式を継続するか検討中 |

表３　子ども食堂　今後の展望

先ほどのポジショニングマップを参照し、象限ごとに子ども食堂がどこへ向かっていくのかを分析する。

Ａの子ども食堂の子ども食堂は居場所づくりを目指しながら配布型の活動を行っているグループだ。これらの子ども食堂は会食を再開する事ができず、配布型のみの活動を行っている。現在は、配布型を通じて会食型（B）へ移行するために地域の方とつながりを構築している。Ａの子ども食堂の特徴として会食が開催できていない分、配布型の他に学習支援などで子どもと交流を図っている点である。食よりも、居場所づくりに重きを置いているグループであるため､配布型で効率的に食品を配布していくよりも学習支援を通して子ども｢食以外｣で集まれる居場所を作りたいという方針である。

Ｂの子ども食堂は会食型と配布型を併用しているグループだ。Ｂのグループは小規模化、予約制など工夫して会食型で開催できている。会食を出来ているが配布型にもニーズを感じており、何らかの形で残す様子であった。太陽の家はフードパントリーの開催頻度を月に二回から月一回に変更をし、今後はイベント形式まで縮小させて、個別支援の方に食品を回したいと語っていた。東山ぐぅぐぅ食堂は配布型を「高齢者向け」に行い、子ども達と会食形

式で関わりたいとしている。ただ、マンナ子ども食堂のように配布型を休止している団体もある。Bは配布型と併用するよりも、特に食ニーズがありそうな利用者に補助的な形で限定的に活用するという方針であった。

Cは食ニーズを目的として会食形式で活動している子ども食堂である。これはWAIWAIのわミーしか当てはまらなかった。これは運営主体がホームレスを行っている団体である。その性質上食へのニーズが高い。また、会食型開催できた要因としては運営者の鈴木さんは元々小規模開催でコロナ禍でも人数の推移が無かったことが要因として挙げている。Cはこのままの活動を維持していきたいという方針であった。

Dの子ども食堂は食ニーズを目的として運営されている子ども食堂である。このグループの特徴としてはコロナ禍新設の子ども食堂が多い事と、ウィズコロナ時代でも配布型の活動を併用していこうと考えている団体が多い傾向があるという事である。コロナ禍で困っている人たちを助けたいという思いから立ち上げに至ったため食へのニーズに対して目的意識が強い。このグループは居場所づくりを目的としているグループよりも配布型の継続に前向きである。困っている人たちに直接支援をする事ができる配布型は、このグループの子ども食堂に支持されていることがわかる。子ども食堂の課題であった、困っている人に届いているかわからないという課題を解決したのである。

Eのグループは会食型から切り替え、体験やイベントを中心に行っている。コロナが落ち着いた今後も会食に戻すことはないという方針が明らかになった。

すべてのグループに共通して言える事がある。第一に運営者が交流と居場所を求めているという事だ。すべての団体は会食・イベントといった人との交流を生む活動を行いたいと考えている。今回調査した団体は運営主体もそれぞれ異なっているが、すべての団体が交流できる活動形態に向かっていた。やはり、人との交流拠点という子ども食堂の核となる部分が重要視されているのである。

第二にフードパントリーを行ってきた団体は配布型を辞める選択肢を選びづらいという事である。配布型の活動は会食形式では手の届かなかったすき間に手が届くようになったのである。多くの団体で配布型でしか恩恵を受けることが出来ない人たちの存在に気付き、配布型も併用していきたいという声を拾うことが出来た。今後も、子ども食堂は子どもの居場所のための会食型を中心として困窮者支援の配布型は補助的に併用して活用するという形式は残っていく。

## 第３章　コロナ禍の子ども食堂

### 第１節　コロナ禍で子ども食堂を新設できた要因

コロナ禍で新設された子ども食堂（せんなり子ども食堂、キッチンキング子ども食堂、ニコニコごはん、子ども食堂Qchan）いずれの子ども食堂の運営主体は企業・天理教といった運営主体で個人・任意団体ではなかった。子ども食堂がコロナ禍でも新設できた要因として、①場所の確保②資金･食品の確保③人材の確保④リスク管理といった要因が挙げられる。

第１に、場所の確保に関しては四か所の新設子ども食堂は天理教会、店舗といった自前で場所を用意する事が出来ている。会食型を開始できていない団体は公民館などの公共施設を利用しており、コロナ禍で使用許可が下りないという課題があるため、自前で開催できる場所がある事はとても大きな要因である。

第2に、資金･食品に関しては中間支援団体や他の子ども食堂、企業といった機関とのネットワークが課題を解決した事が明らかになった。今回取材した子ども食堂は食品に関しては中間支援団体を通じて支援を受けており、困っていないという回答が得られた。立ち上げの早い段階から愛知子ども食堂ネットワークに加入し、フードバンク愛知から食糧支援を受ける事で食材の確保をしている。愛知子ども食堂ネットワークの代表忠平さんもネットワークへの加入率の高まりを感じており、2021年は新設された子ども食堂と今まで加入していなかった団体の加入が進んだと話していた。中間支援団体の存在も大きな要因である。また、企業間・天理教会間でのネットワークがある事も明らかになり各団体が横のつながりを持って運営している事が明らかになった。しかし、資金に関しては子ども食堂によって違いがあり、赤字のまま運営している団体もあった。

第3に、人材の確保に関しては、天理教の信者、企業の従業員などがボランティアとして参加する事で人材を確保している事が明らかになった。

第4に、リスク管理に関してはニコニコごはん、せんなり子ども食堂、キッチンキングは配布型で開催する事でリスクを軽減させていた。しかし、配布型の欠点である交流がない事に課題を感じていた。配布の際に声を掛けたり、感想を書いてもらったりする事でつながりを持とうと工夫をしているようだったが、いずれも会食型での開催を望んでおり、コロナ終息後の会食型で開催するための準備としてフードパントリーを行っているという事が明らかになった。

以上のことからコロナ禍で子ども食堂が新設できた要因としては企業・宗教団体が持つ既存の資源によるものが大きい事が明らかになった。しかし、これは考えてみれば当然の事でコロナ以前から多くの宗教団体は子ども食堂を開催してきた。コロナ禍でフードロスへの注目が高まり、企業が積極的に参入してきた事は今後の子ども食堂にとっては良い展開でもある。では、資源を持たずして会食を行っている個人・NPO法人はどのような課題を解決しコロナ禍を乗り越えてきたのかを次章で分析する。

### 第2節　NPO法人太陽の家の歩み

NPO法人として子どもの居場所を守り続けてきた三重県桑名市の子ども食堂の事例を紹介する。NPO法人「太陽の家」は2015年に生きづらさや困難を抱えた子ども達、大人たちの安心・安全な場所として「太陽の家」を立ち上げた。代表の対馬さんは当時、認知度が無かった子ども食堂という活動を知り2016年3月に最初の子ども食堂を開催した。当時の桑名市では子ども食堂はなく､市役所や保健所の職員も知らないという状況であった。しかし、その職員や地域の方の協力もあって子どもを開設する事が出来たのであった。

～第1回～
開催日時：2016年3月9日
参加人数：22人（子ども10人、大人12人）
～第3回～
開催日時：2016年4月13日
参加人数：36人（子ども12人、大人22人）
～第5回～
開催日時：2016年6月
参加人数：40～50

参加人数が多くなり、スタートアップ桑名から桑名市総合福祉会館へ移動。調理室と食事会場を貸出ししてもらう。飲食可能な場所がなかったが太陽の家は特例として飲食禁止な和室を飲食可能な場所として貸してもらった。移動を機に月２回から月１回に変更する代わりシングルマザーお茶会を月１回開催。シングルマザーお茶会とは非公開で行われる活動で、3家庭ほどの小規模で開催していた。母子家庭が悩みや相談しながら軽食を取るという活動である。

～第８回～

開催日時：2016 年９月

参加人数：46 人（子ども 31 人、大人 15 人）

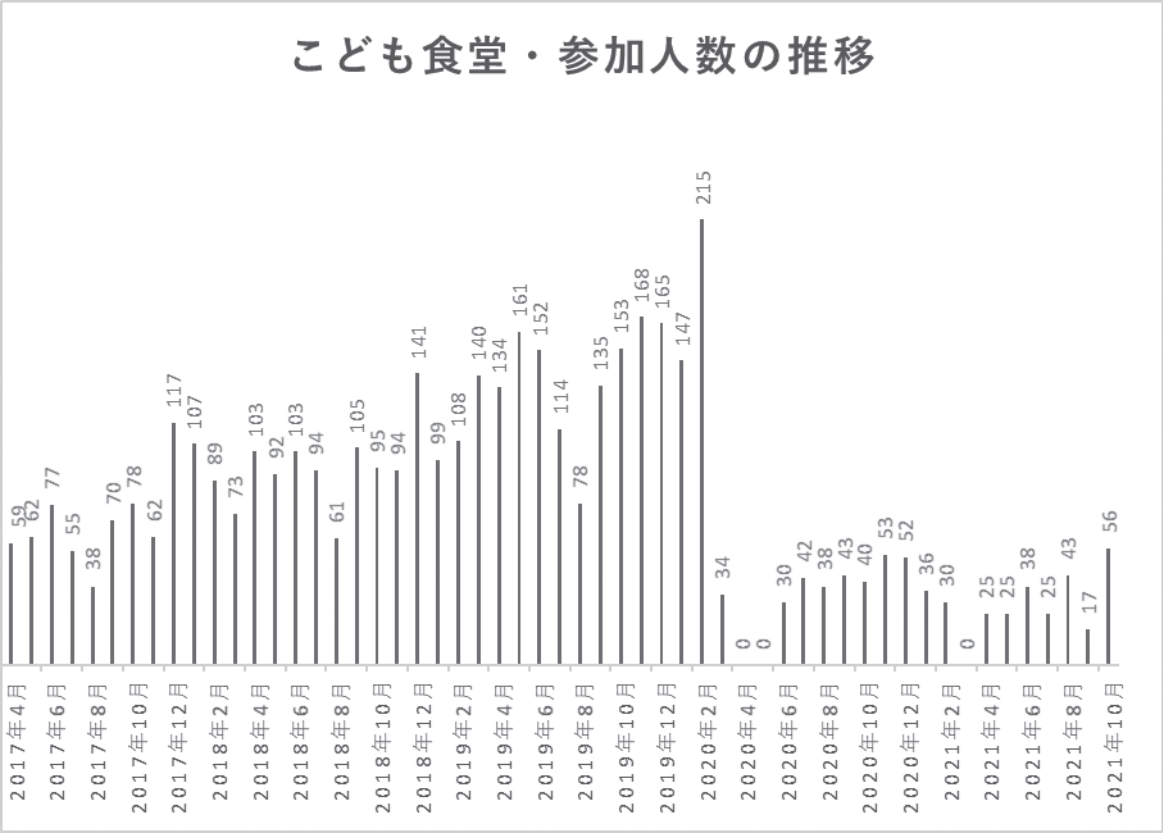


表４　2017 年４月～ 2021 年 10 月の子ども食堂・参加者の推移

フードパントリーは子どもの長期休みにイベント的に開催しており、子ども食堂やお茶会でつながった生活困窮家庭には、個別支援を行い、2018 年頃には無人パントリーを始めた。無人パントリーとは、フードパントリーの日に取りに行けない人のために桑名市総合福祉会館に食料を入れたダイヤルの鍵をかけた箱を設置し、申込者に番号を伝え、希望の時間に取りに来てもらうという形式のパントリーの事である。子ども食堂は徐々に参加人数を増やしていき、2017 年には 100 人ほどの参加者になり、コロナが来る直前の 2020 年２月には最大で 200 人ほどの参加者がいた。

2020 年３月に新型コロナウイルス第１波を受けて会場が閉鎖のため、初めて子ども食堂を中止する決断をした。コロナの影響で会食を伴う子ども食堂・シングルマザーお茶会は中止となり、代わりに緊急フードパントリーを開始した。以前は子どもの長期休みの開催だったフードパントリーを月二回定期開催とした。４月のフードパントリーでは 50 世帯ほどに

配布を行ったが、ニーズが高まり続け、翌月には150世帯ほどに食品を配布した。その後も毎月150～170世帯へ食品を毎月配布し続けた。そして、そこでつながった困窮家庭には、個別支援・無人パントリーを行った。2020年4月からは子ども食堂非公開にし、自力で来ることが出来る子ども達（中学生・高校生）を限定として行われた。子ども食堂は緊急事態宣言が出た時には会場の桑名市総合福祉会館を借りることが出来なくなるため、子ども用におやつパントリーを開催してなんとか子ども達とつながり続けた。対馬さんは「コロナで活動を辞めるという選択肢はなく、逆にコロナ禍でつながりが無くなるのが怖かった。子どもの居場所がない今だからやりたい。」という考えであったと語っている。コロナ禍でつながりを保つために始まった取り組みとして校内カフェという取り組みがある。中学校の教室を借りて、飲み物やお菓子、軽食を食べる場所として開放して自由にくつろげる居場所を提供するといった取り組みである。対馬さんは、「地域のみんなの居場所とすると、子ども達はいつも後回しにされてしまう。ご飯を食べる前や行くところのない子たちにも居場所を作りたい」といい、子ども限定の居場所支援という取り組みもしている。

2021年の8月には、フードパントリーを月2回から月1回に減らした。理由としては、無人パントリーや個別支援の対象を増やす事ができたからである。現に、フードパントリーの開催頻度を月1回に変更した後でも、配布世帯の数に変化はないという。「太陽の家」は今後、フードパントリーを元のイベント形式に戻し、個別支援・無人パントリーに力を入れていきたいという。配布型を辞めない理由としては、「困窮を見られたくない、交流をしたくないという人たちもいるため、その人たちとつながるためにも配布型は必要」としている。また、子ども食堂に関してはコロナ前の誰でも来てくださいという子ども食堂に戻すのではなく、今の自力で来ることのできる子ども達に限定したままで続けている事を考えている。従来の非選別の子ども食堂では、100人～200人規模の人たちが来るため怪我が心配で、一人一人に目を配ることが出来なかった。今の子ども食堂は、子どもと話す機会が増えたという。対馬さんは、「支援の少ない中・高学生に特化した居場所を作りたい」と語っている。自力で来ることのできる子ども限定という選別の仕方は、中・高学生に来て欲しいという思いから成り立っている。太陽の家の子ども食堂は「予約制にしない」事に拘っている。予約制について対馬さんは、「コロナ禍で密を避けるために予約制も検討したが、それではとても忙しい家庭が来る事ができない、子ども達は予約制にすると自分で予約する事が難しいため来てくれなくなる。予約制にしないという事にはこだわった」と語っている。

太陽の家は今後、配布型については辞めずに、無人パントリー、個別支援と困っている人たちとつながる窓口を増やしたいとしている。居場所については、子ども食堂・校内カフェを継続して子どもの居場所を守っていきたいとしている。また、将来的には子どもの里（大阪市西成区のNPO法人）のように常設の児童館を作り、いつでも子どもが来て、寝泊りまでできる場所を作りたいと語っている。

## 第4章　シェアリング桑名の活動

### 第1節　シェアリング桑名の活動目的

筆者は2021年2月に一人親家庭・子どもを支援する学生ボランティア団体シェアリング桑名を立ち上げた。立ち上げの目的は、次世代の子ども達にはつらい思いをさせたくないという思いと若い世代で社会問題に立ち向かいたちという思いから団体立ち上げを決意した。

この時点では食ニーズに目的を感じて配布型を行ったＤの団体である。

### 第２節　シェアリング桑名の活動の軌跡

コロナ禍で新設できた要因としては第３章で挙げた①場所の確保、食材・②資金の確保、③人材の確保、④リスク管理についてどのように解決していったかを述べる。

①場所の確保に関してはシェアリング桑名の母体である桑名女性ネットワークが運営している母子家庭専用賃貸住宅のシェアスペースを借りる事で運営する事が出来た。

②食材・資金の確保については桑名女性ネットワークの企業とのネットワークを活用して、お米やインスタント食品などの配布には欠かせない物の定期的な寄付を受け取る事が出来た。また、フードバンク愛知の支援を受けて食品を補うことが出来た。

③人材の確保については筆者の高校時代の仲の良いサッカー部の友人たちに手伝ってもらう事にした。

④リスク管理としてフードパントリーで極力接触を減らすことで対応した。シェアリング桑名は顔合わせの際に、前述した活動目的に加えて、フードパントリーが生活に困っている一人親世帯たちの日常生活一部となれるように毎月第一土曜日に継続して毎月行うという具体的な目標を立てた。

３月の第一回フードパントリーは立ち上げたばかりで認知度が低く利用者が少なく10世帯分の食料はあるものの応募が少ない状況であった。同時期に筆者はNPO法人「太陽の家」でのフードパントリーに参加していたが、その際に150世帯へ食品を配布したという経験から地域にフードパントリーの需要はある事は認識していた。そのため、単純に団体の知名度がシェアリング桑名の課題であった。

そこで、メンバーの中にはプログラミングを勉強している者やデザインをする事が趣味の友人がいたため、団体のホームページとチラシ・ロゴの作成をしてもらった。そして、そのチラシと名刺を持って活動を広報する事に取り組んだ。「太陽の家」にチラシを置いてもらった。第二回では参加者にアンケートを取り、どの食品にニーズがあるか調査した。回答には「中学生･高校生の子ども達が部活を始めた途端にお米が足らなくなった」といった意見や「お総菜があると助かる」といった意見が寄せられた。そのアンケートを受け有志の方にお米の寄付をお願いする事と商店街のから揚げ屋さんに活動の広報をし、寄付をお願いした。継続的な寄付を受ける事は、定期的にフードパントリーを開催する上でとても重要な事だ。6月の第４回目のフードパントリーには、CTYケーブルテレビという地元のケーブルテレビが取材を受けた。その影響でシェアリング桑名の認知度が高まり、寄付が多い時には12世帯～15世帯ほどの一人親へ食品配布するといったように活動の規模を広げることが出来た。当初の目標であった毎月開催を達成し、開催規模も広げる事ができた。

画像１　チラシ

画像２　配布した食品

画像３　食品を準備する様子

### 第３節　一年間のシェアリング桑名での活動を終えて

フードパントリーのための食品を集めることは非常に困難なことであった。コンビニやスーパーマーケットの大手企業から寄付をもらうには、役員などの了承を得る必要がある。個人経営の飲食店などにお願いすると一度なら寄付してくれるものの継続して寄付して頂く事は難しい。また、飲食店業界もコロナ禍でとても苦しい経営状況であるため心苦しく感じる。最近、企業はフードロス改善のために多くの取り組みをしている。中には、通常価格の商品の隣に消費期限が近い物を格安で売り場に置き、フードロスを減らす取り組みを行っているスーパーマーケットもあった。フードロスに注目が集まったのは喜ばしい事だが、寄付を頂く事が困難になる。コロナ禍で注目度が急速に高まったフードパントリーであるが、コロナが落ち着き、飲食店などの活動が再開した時に寄付が頂けるかが不安である。

筆者は運営者側として、フードパントリーはもどかしさを感じる活動であったと感じる。毎月顔を合わるが会話も受け渡しまでの短時間で行われるため交流は薄い。筆者としては、より多く交流を取りたいという思いがあった。一年間の活動を通じて私たち大学生は話し合い子どもに向けての支援を中心に行っていく方が良いと結論付けた。子どもにとって年齢の近い大学生は親御さん達と交流を深めるよりも子ども達の相談相手として関わっていく事ができる。子どもと大学生が交流する事で親を家事から解放する。子どもを外に連れ出せない親の代わりに大学生が安全に子どもたちを外の世界に連れ出し、刺激を受ける場を作る。筆者は活動を始めた時点では食ニーズに重心を置いていたが、本調査と「太陽の家」の子ども食堂に参加して利用者と同じ時間を過ごすことが必要であると感じた。来年度は、体験・経験の格差に立ち向かい子どもの体験・経験の場を作っていきたい。

## 終章　アフターコロナ時代の子どもの居場所のあり方

子ども食堂はコロナ禍で、活動の方向転換期となった。コロナ禍は子ども食堂に活動の配布型というレパートリーを付与した。配布型で困っている人たちを見つけ出す、小規模で感染対策を行いながら会食型を行う、食以外での交流方法を模索すると子ども食堂ごとに多様

な活動変容が起きた。配布型は会食型の課題であった本当に子ども食堂を必要とする人に届いているのかが不安であるという点や毎回の子ども食堂に参加する人の数が読めないという点[31]を解決した。ウィズコロナ時代の子ども食堂は活動目的に応じて得たレパートリーをメリット・デメリットに応じて取捨選択できるようになった。配布型の活動でつながった家庭と今後どのような支援を行うのか。また、配布型の活動を今後も続けていくのかは各団体に委ねられている。しかし、元をたどれば子ども食堂は「居場所づくり」の活動である。生活困窮家庭の支援をボランティア団体だけが担うという事はとても大きな負担である。地域で取り残されている人がいる事は行政や他機関にとっても共通の課題で子ども食堂だけが解決しなければならないものではない。太陽の家は他機関と協力して、無人パントリー・個別支援の取り組みを行い、フードパントリーで出会った家庭の相談窓口として桑名市の支援につなげる役割も担っている。子ども食堂を中心として様々な機関の支援に繋げていくネットワークの構築し、他団体・異業種がそれぞれお互い様の関係を作っていく事で子ども食堂が背負っている負担を軽減させ、無理のない持続的な運営を目指している。

各団体はコロナが落ち着いたら「会食・体験」といった人と交流する居場所づくりに力を入れていきたい。そういった観点からは、やはり最も重要なのは集まり、同じ時間を過ごすことであるということをコロナ禍で再確認できた。集まることで、「貧困」も発見できるし、地域も「活性化」する。人と交流することで、人々が社会で抱える悩みや苦悩を和らげる効果がある。子ども食堂は子ども達に「居場所」を失った子どもに家庭に代わる養育の場と、ボランティアスタッフから存在まるごと受け容れられる安心感と信頼関係、子ども集団における役割の付与という子どもの成長には欠かせない「居場所」を提供する。この人と関わる、居場所を作ることの必要性を社会全体へ向けて投げかけていく必要がある。それを担うのは若い世代である。地域社会に置き去りにされがちな若い世代が発信することで、社会をより過ごしやすく変えていく。筆者は今後も運営者たちと共に、子どもの居場所の必要性を共有し、様々な制限の中でも、子ども食堂が後回しにされがちな子どもの「居場所」をどう作っていくかを共に模索していきたい。

## 【参考文献】

成元哲，2017,「子ども食堂運動の挑戦：地域の中のもう一つの居場所づくり」『中京大学現代社会学部紀要（特別号）』27-42

エリック・クリネンバーグ著，藤原朝子訳，2021,『集まる場所が必要だ：孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』，英治出版

大澤朋子，2019,「社会的養護と子どもの居場所」『実践女子大学生活科学部紀要』56：61-68

湯浅誠，2019,「こども食堂の現状とその意味と価値」『チャイルドサイエンス』18，15-20

31）成元哲, 2017,「子ども食堂運動の挑戦：地域の中のもう一つの居場所づくり」『中京大学現代社会学部紀要（特別号）』27-42